

IV-468

住民意識からみた余暇空間としての北海道の港の利用構造に関する一考察

開発土木研究所 正員 佐野 透

開発土木研究所 正員 水野雄三

開発土木研究所 正員 笹島隆彦

1. はじめに

成熟化社会に移行しつつある現在、快適で高質な余暇空間としての社会資本の整備が求められており、港湾においては親水性の護岸や防波堤などの施設の整備が進められつつある。このような中、まちの余暇空間として港をさらに活用していくため、地域住民が港をどのようにとらえ、どのように利用しているかを把握する必要がある。本研究では、まちの中の種々の生活空間と対比して、余暇空間としての港に対する住民意識と利用状況をアンケート調査により測定し、これらの構造を分析した。

2. アンケート調査の概要

アンケート調査の対象者は、北海道の重要港湾7港(函館港、小樽港、釧路港、網走港、留萌港、十勝港、紋別港)の周辺3~4km以内の住民約3千件である。アンケートは平成6年11月に実施した。本研究で扱ったデータは、回答のあったアンケートのうち、今回分析の対象としたアンケートの設問についてすべて完全に回答された766件である。分析した設問は、A. 過去1年間に余暇目的で港へ行った頻度、B. 余暇空間としての港の満足度、C. 自宅以外の場所で余暇を過ごす場合の満足度、である。

3. アンケート調査の結果と分析

(1) 余暇目的で港に行く頻度

アンケート調査では、過去1年間に余暇の時間において港に行った頻度を「月数回」、「年数回」、「年1回」、「行ったことがない」というカテゴリーで余暇目的ごとに聞いた。これをそれぞれ年10回、3回、1回、0回と重み付けをして集計した。図-1は、余暇目的ごとに港に行った頻度を合計値で割った値を横軸に示している。つまり、余暇目的で港に出かける時どのような目的がどの程度占めているかを示したものである。この結果についてクラスター分析(完全結合法)を行い、2つのグループに分類した。この2つのグループの特徴は、「釣り」と「食事・買物」の割合の違いで、港の利用のされ方が異なることである。「釣り」の割合が「食事・買物」より大きいグループとして網走、留萌、十勝、紋別、「食事・買物」の方が大きいグループとして函館、小樽、釧路となっている。

(2) 余暇空間としての港の評価

図-2は、余暇目的ごとの港の満足度の平均値を港全体の満足度の平均値で割った値を横軸に示している。なお、満足度は満足を100点、不満を0点とし、5段階である。この数値が1より大きいほど港における余暇目的の中でもその目的の評価が高いことを示している。この図で港に

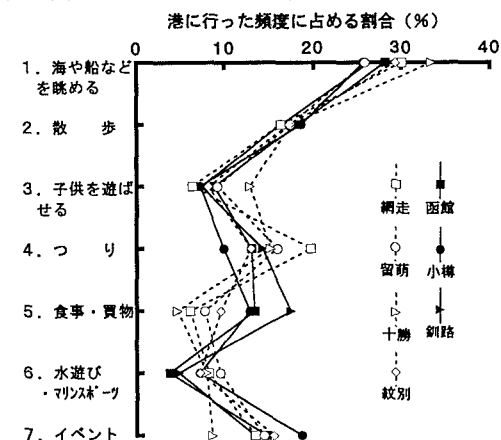


図-1 港に行った頻度に占める余暇目的の割合

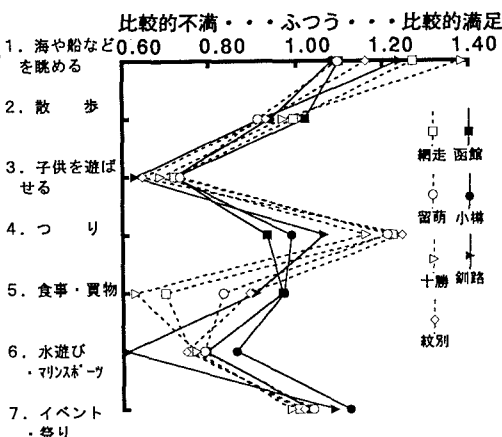


図-2 港に行った目的ごとの評価

行く回数が「釣り」より「食事・買物」の方が多いグループに属する函館、小樽、釧路は「つり」と「食事・買物」の評価がほぼ同程度であり、別のグループは「つり」の評価の方がかなり高くなっている。

（３）相互の関連性

１ 余暇空間全般に対する港の評価と港に行く頻度

図－３は、余暇空間としての港の満足度を余暇空間全般的の満足度で割った値を横軸に、港に行った頻度を縦軸に示している。横軸の値は、１より大きいほど余暇で過ごす空間の中でも港の評価が高いことを示している。この図から余暇空間の中で港の評価が高いほど利用頻度が高くなる傾向が伺える。すなわち、地域住民の過ごす様々な余暇空間と対比して、港の評価が高いほど地域住民の足が港に向けられると推測される。また、「つり」のグループに属する港の方がこの傾向が強いと見受けられる。さらに、港は総じて比較的评价が高い空間であり、余暇空間としてのポテンシャルが高いと推察される。

２ 港の評価と港に行く頻度の関連性

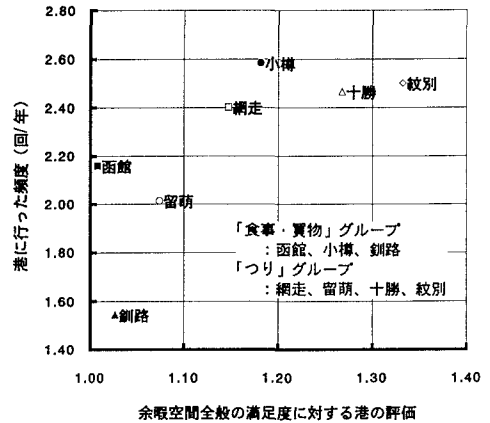
図－４は、港における余暇目的ごとの評価を横軸に示し、余暇目的ごとの港に行った頻度の割合を縦軸に示したものである。評価の高い余暇目的ほど利用頻度に占める割合が高いことが伺える。

３ 余暇空間としての港の評価を左右する余暇目的

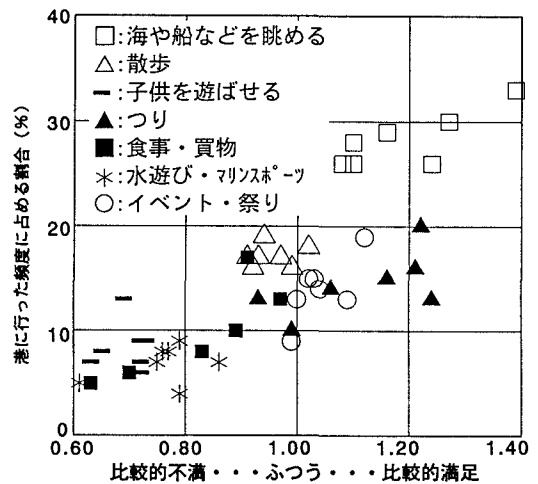
余暇空間としての港の満足度を外的変数にとり、余暇目的ごとの港の満足度を説明変数として重回帰分析で算出された偏相関係数により重み付けを行って、余暇空間としての港の評価を左右する余暇目的を検討した。これを図－５に示す。この図から各港共通して影響の大きいのは「海や船などを眺める」や「散歩」であり、その他の目的は各港それぞれに特徴があることが伺える。

４. おわりに

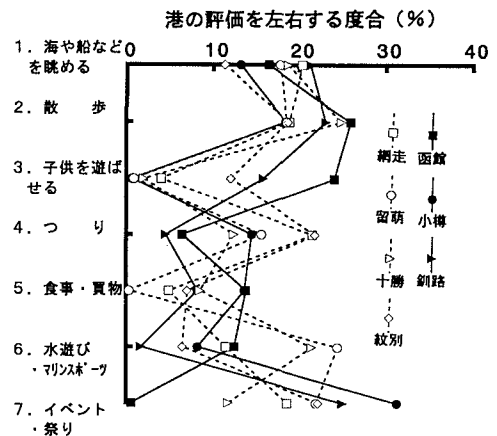
このように、地域住民からみた余暇空間としての港の評価は比較的高く、また、港の利用に深く関連することが推測された。つまり、地域住民が過ごす余暇空間の中でも港の評価が高いほど利用頻度も高くなること、地域住民の港の利用の仕方で「食事・買物」型と「つり」型の２つのグループに大別され、それぞれ地域住民の感じ方が異なること、港に行く目的のなかでも評価が高い目的ほど利用頻度が高くなっていることである。また、港全体の評価を左右する余暇の目的は、各港それぞれに特徴があることがわかった。今後、地域の広がりなどを含めてグループごとの分析を進め、余暇空間として地域住民の足が港に向くようにその手がかりを検討していきたいと考えている。



図－３ 余暇空間の中の港の評価



図－４ 目的ごとの評価と頻度に占める割合



図－５ 余暇空間としての港の評価を左右する目的